

〈書評〉

再生と再編

＝肉体的表現が心理的表現のメタファー＝

浦本寛史



東邦定氏の写真展（eros・love・thanatos＝情念の世界が見てみたい＝）が平成28年2月9日～14日まで開催され、同時に写真集を出版した。その写真集を評する。

写真集は人間誰もがもっている情念の世界をeros（官能）、love（愛）、thanatos（死）の3部作で構成されており、「情念」と言う言葉そのものが受動的かつ激しさを感じ、人間の理性を超えた魂の病理として位置づけている。そこで東氏が意図する「情念」の3部作を写真の歴史から紐解いてみる。

写真史の中で1970年代以降は「像の表出と文化的意味づけの過程」と考えられてきた。また、写真というメディアの美的かつ技術的発展と刷新的な可能性で大きな期待を集めた。それはモダニズムの展開を加速させた。また、巨匠と呼ばれる作家たちによって写真モダニズムの規範が整備されていった。

しかしその一方で写真メディアの特性である「複製可能性」、「模倣性」、「虚偽性」に注目が集まった。その一連の特性はある意味写真というものを「非芸術的」、「非思想的」、「非作家主義的」なものになり、ここで生まれた言葉が「写真の重要性は表象ではなく、写真で表現される行為そのものである」と言うことが強調された。それは言うまでもなくコンセプチュアル・アートの出現と被る。まさに東氏の表現したeros、love、thanatosの作品はその狭間にある。また、女性のヌードという1つの記号で示す意味や価値は、人間の営みや生から死に至るまでが体系化された写真思想に繋がっている。このような記号化された思想はミシェル・フーコーらフランスの哲学者たちが体系化を図り、彼らの提唱した構造言語学や構造主義は多くの作家に影響を与えた。ここで東氏の作品を身体、色彩、マチエールに分け記号化を試みてみる。

例えば、【eros】^(写真1) 女性は作者からすれば異性、ヌードは生まれたての姿、危険性の高い身体、作者からすれば、官能的で支配下における自我の記号である。色彩はerosを利己的で暴力的とも思える女性の身体を褐色に変色させ快楽への挑発を演じてさせている行為こそが欲望の記号である。マチエールは褐色の画面にキズのような光を浴びせ、女性の身体に走らせる。そこに危険な香りと荒々しさの肌合いを官能の記号に置き換えることができる。

【love】^(写真2) ヌードの女性は視線を向けることはなく柔らかな光に身体を委ねている。そこにはふくよかな母性の記号である乳房が強調され利他的な記号が示される。その色彩はerosとは逆で身体全体を銀灰色に加工され、淡いグレーは女性の身体を官能美から遠ざける記号として機能している。マチエールは静寂のなかで淡い光は氷を溶かしていくかのように柔らかな肌合いと濃淡の無い表現を愛の記号として表現している。

【thanatos】^(写真3) 暴力的でもなく静寂さでもない「暗闇」の世界を迎える。そこは単に「死」ではなく、神格化した人間の「生きる」エネルギーの終着点で繰り返される様々な情念をイメージとして捉えられ、モデルはその情念と闇の恐怖に怯える表情を記号として完結している。色彩は「暗闇」の記号でありダークブルーに加工され、thanatosに対する再生を探求している。その再生への願望はマチエールにも表れていて、女性の身体を一枚一枚の皮がはがされ生命の再生、そして再編を感じさせる質感に仕上げ、死からの再生をも意味している。まさに、最終章のthanatosは肉体的表現が心理的表現のメタファーになっている。さらにそのぼやけたメタファーは横たわる女性の身体を現実の中で幻影を繰り返し緊張関係を保持している。



写真1

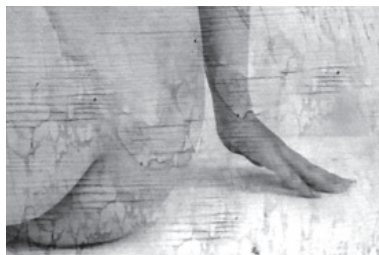


写真2



写真3

【資料】

- 浦本寛史, 2016「官能と愛と死 情念3部作」沖縄タイムス掲載 (2.9)